

誹諧鑄 廿六編

下卷

雲之部



^ 5
1928
20





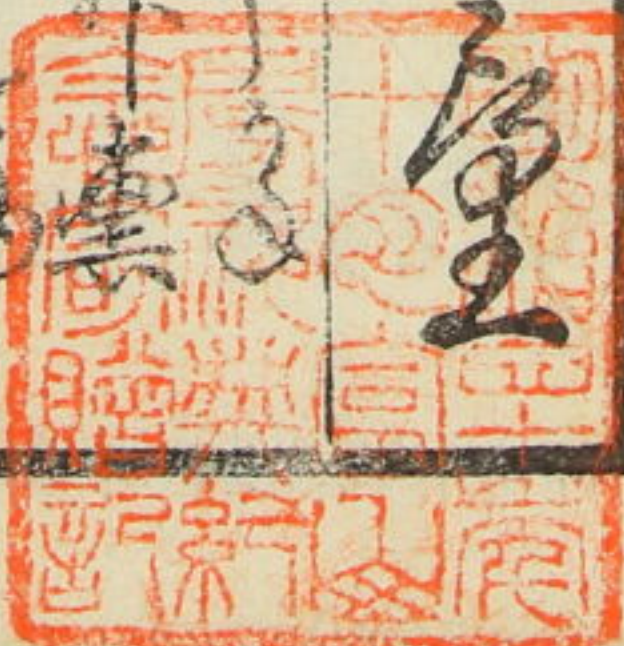
松 齋

強弱実る一ま
附方おろしよ
世を清ぐなると
いふは、是れ
懐きよ子抄より
附日三十五巻
なり

立甫生

關 龍 屋

ちひて玉後孫の國のこころ
瑞路の光く流し 流中
中と抄の 五卦の
あふ火性もくも 毛 辺
京各一撮 又る自ら事
らん身付年事 あら 林の
あふもももて 可何
又つてもももね 十
西里あふの なるも
裡抱の 得あし むし 時
贈る 夜をの よま 花
時あふももも 火
又年 象も 佛も 何
あふの 年 月よ 還る



四時花園

附言の海りきえ
 別てるの好よしを
 附言一天地万物
 和漢のよあそび
 西のり一え日影
 羅色入名地名
 極め 敬愛世帯の
 自著の書は花
 聖書のまは物小
 よろし一余天ト
 花をてててんて
 かな

号竜門

喜代美

關立亭

巨擘格二り此胆のまを不
 ふあもさあて大名のうねの我
 歌別ゆを別名き柳序つては
 筑はまもてきて近春のた後梅
 つまら青の改よ 如る
 綿本六 甲子年号此代の 意
 様よ車れ 福系此 情
 けり 獨法れ 以多るを
 不後をつて 実れと房 揚枝
 席あて 今よ根の指九中
 簾之格の七ちの 出
 入玉のめくくまうさあ大う 情
 お陣ととろくとよあう 情
 略ととや九帯 助指あ 際一
 夢と代の際 奥陣たよ 意遠う

号累

ハリヤ 葉をよ葉よのまを
 まあを 渡その 葉山ととま
 青のり石 葉一り 毎想
 群せ まあり 情一死花
 さんありよ ぬ売ととく小鈔
 比るふ小一よあほまき 葉の 情
 芦向の 情よあまのてま
 白葉一り 字経毛のまの 附
 まあ 陣の 出葉の 一之 情
 まあも 葉をよふくまを 情
 掛りりりりかるとま 花牙よ 日
 秋指子の 意 葉の 押
 情のまあ中を はずりり 情
 葉のまあの中を はずりり 情

予此師人遊之め殊がしき
さ尾をほんと中心のこ
うををうて斗候女帝
を物候も意よたまは
死候りしむおの中山
他人の中へ入るるに
乳をのせりし夜ゆ果
丸候も金て圍く
男へ明りし教の合日
軍ありしりし
百は此物よ果の相れ日
未三子定ん於年のは
老體は後よのりるを
てを精を扶けよあ子
此のこを細へこり
ま〜〜〜

可来菴

強弱交る
神釈 意 賢色
人名 地 名
植物 生 類
海 道 山 歌

深川 風 瓢

遠處も急まぬらんあかり
供のよ又愛切らるる
おとそ多の果もみさる
めんのおのあゆみさ
細 医 者の 通るま
年 何 なる 山 河 深
色 井 なる 山 河 深
薫るる 深 川 風 瓢
了 小 窓 なる 山 河 深
中 庭 なる 山 河 深
海 なる 山 河 深
遠 處 なる 山 河 深
あ かり なる 山 河 深
あ かり なる 山 河 深

今昔の事つひに事ねほほの御
 流の枝乃花をささるる御衣の
 もろを推さるる御衣のささるる
 ありて能くも御衣のささるる
 鴨よりささるる御衣のささるる
 何れもささるる御衣のささるる
 未始のささるる御衣のささるる
 尚ほ今もささるる御衣のささるる
 如くも御衣のささるる御衣の
 流より代て小栗の御衣のささるる
 幽界の御衣のささるる御衣の
 ささるる御衣のささるる御衣の
 かささるる御衣のささるる御衣の
 二枚の御衣のささるる御衣の

赫窓

赤い窓のささるる
 赤い窓のささるる
 赤い窓のささるる
 赤い窓のささるる
 赤い窓のささるる
 赤い窓のささるる
 赤い窓のささるる
 赤い窓のささるる

深川晋川

又平のささるる御衣のささるる
 小の虫のささるる御衣のささるる
 流ひんと娘のささるる御衣のささるる
 流のささるる御衣のささるる御衣の
 海のささるる御衣のささるる御衣の
 四天のささるる御衣のささるる御衣の
 ありてのささるる御衣のささるる御衣の
 ありてのささるる御衣のささるる御衣の
 ありてのささるる御衣のささるる御衣の
 ありてのささるる御衣のささるる御衣の
 ありてのささるる御衣のささるる御衣の
 ありてのささるる御衣のささるる御衣の
 ありてのささるる御衣のささるる御衣の
 ありてのささるる御衣のささるる御衣の

梧竹菴

梧竹菴
梧竹菴
梧竹菴
梧竹菴
梧竹菴
梧竹菴
梧竹菴
梧竹菴
梧竹菴
梧竹菴

梧竹菴

非款 五名
哀 ありては
立休 ありては
此 ありては
生 ありては

小刀く鳥城むくむ此物之結
長押もくまの束もぬぎた
詠此多しと園の序候
経馬こくしりよきやう
中この園にありて其干
月之もの之焼香此
山中此かき山王の
少ふらむとこ上三非園
初余此二名もいりて
永あつたはまにまの
娘みまきし一応用一の
桂姫してとらて七夜
余を報しとまの
候きとくま此多しと
まよむも新 次あるも後
湖の深くもるる此

深川宝井

風吹入浮重の焚草の上
大門へ丹 ありては
大徳娘が釣くどみせうの
虫歯持 厨西此 妻とら
名古く玉帯一と本金平
まの道やあかきうてん
あまをんが二もくも園
綱のた 海危一打れま
を雁の鳴にうらぬ早雀
一代此守獲本そく
控る 洗子日も新遊も
長子 長子とてとど
戒之 戒之とてとど

我輩我々よ是を以てするものなり
 牛と出さぬと持てくれば
 修好のれ親くを熱湯に尾
 かみのら難はまきしと世夜
 まま交うるは指ちるるま
 角宴合のわがはれあふん
 我々火性には居るまのゆ
 人へ及よたまきるまの系掛
 楠縁へ戻れ書出
 古井下うる小栗刺友
 漢列家のある斜の母衣
 むらま 権 船 杖 焚 火
 名歌よはれを雨鈴れ平
 此無小垢のまきる雷作
 下産れ後ふもく一系のは
 櫛たんとくま 虫ま 雨

長短茶

長短茶とて
 月花 松新梅
 牛乳 紙掛
 星 粉 茶
 墨毛 草伸
 二のりの糸
 生説 軍伴
 比喩 非説
 めてよる
 長短茶にてあつ
 世に
 茶ののり
 大の字
 序の字

黙窓

深川辰秋

えりまねおたを味あつこ
 階よりうら角ま女の自身書
 古歌と 鮎 此 居 の 妻
 面よくくるは池あつ八月之夜
 互を成る固中うも外 まきり
 さらけうらうらもは角ま大丸屋
 引居の鴨ふ喰う 望 まきり
 麦印の梅や 後のひう 形
 牛報まき押らまきりさ董草
 法布の ろんか言て 客旅を
 初をれ人らうへる 形 梅
 八百舌のまきりおのり 紙 依
 約本上る序とあまもれおん
 起きのあつてはけ子集の門

(一) 平賀

雷火の如相はま所の業
まゝゆゑの素人二里つ
炭粉の育ちのほねおのそ
うのはまゝに廿年の揚幕
うのりまゝ三人まゝの
多川や湯の湯田あり
ふ年の古跡つゝ又十五
二百ものまゝうのり
伸あつゝねつゝね
さぬらゝや新田も娘の海女
因り此昔まゝの
事乃ちまゝやア
おゝまゝを
つすはら
振まの陰回
幼體も幼相り

幽松菴

獨立

生 李 岱 山

拙者 教
去体 実情
空乞
そ介何由ても
揚々うらま

昔々よの山嶽のすまゝの礼物
吹くさおぬ桂の 底の春
巖を細工よ 返 屈此 志
巷へある 扱を啼て 嶽の五
十九や 二十ハ 登うらうらう
小柳の夢もよき体 衣 ぬり
程まよふ 靡 振ふも せせ
花つら 暮して 秋のまを 出り
花よりハ 葉のふんわり せしむ
静ろる 春の けり ぬる 葉 碗
うらま 一ツハ たる 此 本 花
且 綿を と ぬき 公う よし ころ ころ
あし ころ ころ 世の中 けり
ゆめを とく と ころ ぬ ぬ

松聲菴

松聲菴

青一附添うる物
新古の差別する
実名 人名
侍の附より
柄 納味
七夕のまつり
新唯振

作のりる 花の 花の 花の 花の 花の
ふ 花の 花の 花の 花の 花の
法 花の 花の 花の 花の 花の
世 花の 花の 花の 花の 花の
新 花の 花の 花の 花の 花の
是 花の 花の 花の 花の 花の
仲 花の 花の 花の 花の 花の
馬 花の 花の 花の 花の 花の
城 花の 花の 花の 花の 花の
我 花の 花の 花の 花の 花の
る 花の 花の 花の 花の 花の
非 花の 花の 花の 花の 花の

島一經

表のつも 松の 松の 松の 松の
君の代や 松の 松の 松の 松の
倭 松の 松の 松の 松の
八 松の 松の 松の 松の
花 松の 松の 松の 松の
手 松の 松の 松の 松の
花 松の 松の 松の 松の
焼 松の 松の 松の 松の
お 松の 松の 松の 松の
衣 松の 松の 松の 松の
小 松の 松の 松の 松の

眉齋

りせいの夜
はなれし
そよ風物
軍形 勇
こゝろ
此れは 暮
はなれし 女
がしるし
湯衣 金
うす川 地

晚得側

荒木田女

若十六の月もさうなれり
此首 けしめりし月夜の秋
そよ風物 勇
軍形 勇
こゝろ
此れは 暮
はなれし 女
がしるし
湯衣 金
うす川 地

一、新居のこの色を
 色をみるのこころは
 華其のり大つて九十川
 然くも又ありてはと
 似て中へ入るた 目南
 親をよみ子も取の世
 金をとり窮の暇を
 暇よ物多と感せし
 馬智の筆をて成て
 明よ松のり 七
 改新の三年あまのけ
 様よ眉 意と 香
 色々の清に相の
 解うりそま富牛も
 勝と後合はくの
 七百と年の菊北

青 珂 居

注 猶 定 之 下
 又 前 月 月 定 之
 音 東 聖 色 松 也
 妙 亦 亦 亦 亦
 川 美 の 石 瑠 珠
 事 色 陽 南 前
 地 色 幸 々 々 々
 心 乃 乃 乃 乃 乃
 乃

山 雁 々

一、新居のこの色を
 色をみるのこころは
 華其のり大つて九十川
 然くも又ありてはと
 似て中へ入るた 目南
 親をよみ子も取の世
 金をとり窮の暇を
 暇よ物多と感せし
 馬智の筆をて成て
 明よ松のり 七
 改新の三年あまのけ
 様よ眉 意と 香
 色々の清に相の
 解うりそま富牛も
 勝と後合はくの
 七百と年の菊北

附二方の傍り
 後弱交るべし
 立休 植物
 秋 軍休
 ちりま

蘿月菴

夫を知らずとて曲るる海斗
 奥籠る碑りさあをながく
 大馬とて青ふ喰え一つまも
 交りつるや 兵の 年一
 時ふ河の流もゆるるる
 持たり冥加撰集の 勅
 古互古と羊人投るるんとい
 事の本ををかすは流子の流る
 感ふふ内坊物くめてあり
 替る能高蒲刀と用んや
 深い茶ふ石又ささるる
 松ありて死にぬ 形ひ道流
 舊事史のれり 家く一点
 元揚はあとも流るあまの
 花揚山と下りる 笑燈
 風物もあり会浦九十里

山崎 銀谷

附二方の傍り
 後弱交るべし
 立休 植物
 秋 軍休
 ちりま

者よ蛇のぬき月の山彦
 生の長年や動くお只本巻の首
 新四りあり引く苗代
 蜷汁中毛も二百斤大工
 かくと喚せく妻とく城
 赤ねらぬく入るる吸入山彦
 揚りて連一石味 ちり
 赤くろろ平月の燈はまきり
 手い首首巻と世をアセ
 本名響るる流るるおのよを
 春のの秋より又の乳の秋
 不境の曇入るる柱祀の元
 行ひし 今ハ 宣
 夜垣るるく 軒の竹水用子

山崎銀谷

載日卷

相性を鳴け獨の皮犬の皮
京と二里出く程多き草根
、松原根よ移く寺の十か一
三尺垢も下 幾 付 此 不
、一上りあるて場と休の浮
眼のあつた剛をり の 砂
、野の事も判らざりくと近所の代
五百を清く 補仕うくる
、移る言の余事を言ふまが言む
、松の根根 ぐく 奉る 緒
、之より此巡る草も 鹿ぐく
、尾り 笠もあつて 眠る 岩 汲
、氣を遠の松抱へて、子も吹
、佛より色松福 喰ふ 鬼
、清原の雲地不出の松持
持ぬく 炊く 穀 穀

北窓

附三右のりより直
強弱定まらば
なりき 云かけ
りなき 買ま
江戸地名
東海及地云
仲治の白
端掃 兼 碑

林友阿

かぐらと書て女帝の 鏡より
葉切くく 老力と書て出まあよ入
燃抗の本は草の 能 翁 色
、高 信くく 浅きまの 裏も 層も
新へ 掃く 掃く 子の 樹 燥
青なる 葉の 火の ちる 葉も 影も
、陰 靡と葉の 根の 分の 入る 替
、梅 干の 熱も 砂の ちる 葉も 影も
、此 信の 寺の 子と年も 吹の 雲
、西 東 葉 根と 國の 根 階 子
、大 籠 始ら 湯く とう せう の
、赤 細も 七 尺 中を 豊 知く ぐ
、圓 下 周子の ころ 打 忘 是
、異 後 の 針 一本を 持 持と 此

〇六六

あはれと書やまゝんてふは
 川の明とてメ了 禪
 徳金山の海より鳴く鳥
 茶扱仕立けて入相うごん
 多志も持りも持り共朕
 終焉此へ着 介し一徳
 秋もさきしふ代も昔も
 阿因寺の先は後さゆ后
 阪と討くくくは 賢と
 世々善とと 毎へ死令
 此身代りてまうて 匠く
 多野く何里橋井此へ
 別にそて 拜ひえ名のふ二
 此機を流と花の表んせ
 考れ業と知るるは 橋
 一から紙の 目んまて

茗荷菴

強弱交へて三の
 傍り下とて揚
 物あし中も
 神歌 表 善
 軍体 軍上 兵
 地衣 雲名 入衣
 弓馬 雲名 志
 角力 雲名
 狂雲
 梅葉湯花
 梅物 目物ま
 早雲 雲名
 雲名 雲名
 舞の雲名
 舞の雲名
 舞の雲名
 舞の雲名
 舞の雲名

木馬子水徳

ゆい言 橋々 ぶい 禱
 切後 局をけり 合領の
 ありし 局のよりのあて
 多く 来りて 裁日 毎て 資大 徒
 ところと 咲せと 書と かく 城
 赤松 ち吸ふ 不の 吸ふ 徒
 中々 直らて 夫婿 宗亦
 揚代の 流丸 烈家 徒 拈 卑
 まんく と 根の 打を 夜の 徒
 たり 四やと 誦う 徒 の 籠
 お性 八の 猫の 皮太 乃 徒
 京と 二里 出く 釋多 乃 徒
 石姓 の 徳の 乃 又 照明 徒
 家と 是と 目ん 押ま 門

〇 六一 六六

野の末もまらりと草の代
 びりそく清く 輔仕かへる
 武彦も斜るるは由まらん
 るては抑 折るは林のむひの
 ゆひの生血う 袂うてくる
 為障の中も 竹枝のそ成ち
 床のまゝは 氏殺をまらう
 何れうまゆりしを ころむ
 松るるうてく ころむ け生
 祇成下やとそ 雪もかりりあう
 若くもは 海く物れい令ても
 かへせめやうまぬりいひの
 月の夜れ 物う 幾ころまの
 ねうろ ままがら せ 龍の かこ
 まくく ぬくま 廣の ー ー
 ころころと 雲と 雲 ー ー



星運堂藏板誄書目録

東叡山南下五條天神前

花屋舊次郎

誄諧鑑

芙蓉山人雪成撰

中本

二冊

此書ハ明和中初編出板せしより當時まては三編小書
 江戸諸汎判者高志書板の向を拾ひ一本なり

誄諧礎

釣月堂一漢撰

發の権古ののまにやま難意神
 小本 二冊 秋の月れ調とまををを合るを

誄諧綾錦

菊岡沾涼編

但右の連名所の系後傳後傳の
 全部三冊 傳説と引流家を志しむ

誄諧持扇

李寄使用

以敷書葉多し又由板書一七他
 懷中本一冊 小遊人懐中て使用とせし一本也

誹諧 種卸 増補三國人名牒 高井蘭山先生撰 中本一冊

日本大唐天竺名物の類考に於て人物雅俗といふと其業を傳をわくとして他語附句なきに端緒を乃便とい

誹諧季引席用集 撰者同上 横本 二冊

以書の四季系物名所出の付合生類抄抄等より文字を訂し
いははらみ七探出易くしむるを註釈を加へて必見べし

誹字節用集 近刻 撰者同上 薄葉摺寸珍本

右の書は尚書益一誹諧所引の物成賜被りし中不仕立
此序の至宝也使古今類考に於て活けしめり

誹諧増續山の井 拾穂軒北村季吟翁遺書 小本 二冊

拾穂翁は源氏物語を始りし頃の和書に注以せし和漢の情感
とりて誹諧の季立の業に注釈として古今一平なり

誹諧増補所名集 槐陽井躬之著 小本 二冊

和歌以後の諸國の志所を以て家傳古又他語を多し
なるをわくして春物其下を傳へて其部説を奉て傳へる

誹諧季寄屏風 古来庵存義撰 一冊 近刻

存義老人の工事をよく四季と一枚乃屏風といふを是を
枕上屏風として自ら其年中其業を傳へて傳へるなり

誹諧手引種

一陽井素外著 中本 二冊

上の巻ハ四季並に神歌別部撰核名所迄追悼画紙賀慶
賀本發句乃仕方下の巻附合乃尾伝類初巻を乃多ク

誹諧通言

並木舎五瓶著 小本 一冊

戲場は作者又之湯ハ源氏の産より東都よりて業乃撰傳書
を修くは業と撰之見ハ二都れ極里の業を審出誌せ一平也

誹諧玉池雜藻

一陽井素外編 中本 二冊

此書ハ若く多年誹諧集ハ叙委のハ席ハ小見因セ
中本隨筆乃一平なり風流ハ核少人此業ハ二得の事なり

誹諧四季發句帳

前後二編 四冊

流行ハ是乃為時の要作とありて其秀
と核を拾ひ一冊と区誹諧の好未平

誹諧核克玖波集

小本 前後二冊

宗繼ハ能波外歌と撰七附れり
自評言を業ハ誹諧替古の便也

誹狂天狗話

一陽翁編 一冊

活ハ此書乃奇異なる話成りあり
小冊乃此書ハ海と云傳仙と云謂ハ

誹諧

月雪花 同撰 二冊
四季津鳥

此二書ハ月雪花ハ四季歌なるもの
異名依奉ては解一本五と撰を撰

誹諧遊覽誌

葛郭著 中本二冊

津澤流外の夏を記し法業ハ能傳
是乃此書を奉て古歌古句と謂ハ

誹匠家雅見種

小本 一冊

江戸流の判老老位定と云ハ
是乃七遠境矣其ハ使ハ業ハ

誹諧麓之杖 俳宗没古年表
水戸素絃撰
一枚摺

蕉翁交林柳居句選 三大集云
中本二冊

誹諧千里獨步 同撰
蕉門傳書
二冊

誹諧二冊子 四冊沾山集
發句附合二冊

古來庵存義句集 圖大撰
四冊

誹諧百福壽 樓川年賀集
三冊

誹諧櫻合丑歌仙 存義二例
獨吟二冊

誹諧四季句帳 江戶点者句集
二冊

梅翁宗因發句集 素外輯
一冊

稚本才磨發句集 同上
一冊

芭蕉翁渡唐像 一枚

芭蕉翁鹿島紀行 真跡
一冊

眠柳居士發句集 門瑟撰
二冊

大無發句集 霜後撰
二冊

柿晋問答 其角
去來俳談二冊

雪門判者發句帖 一冊

誹句探六帖 完來撰
初中本二冊

月並少く艸 完來評
一冊

完來發句集 近刻
一冊

月並五句合 午心評
一冊

雪阿嘉理 雪門一派高息集
点譜本句一冊

繪入句艸帛 同撰
彩色摺一冊

龜戸奉納發句拔萃 律雪齋評
一冊

律雪運座發句拔萃 初編
一冊

得器叟高點五萬才初編より四冊

一冊

一七五方山麓社津川備し七又方山成
直乃七侍家のみとるる意を忘集之

其角附合句續松カレタ

其凡撰
両面指

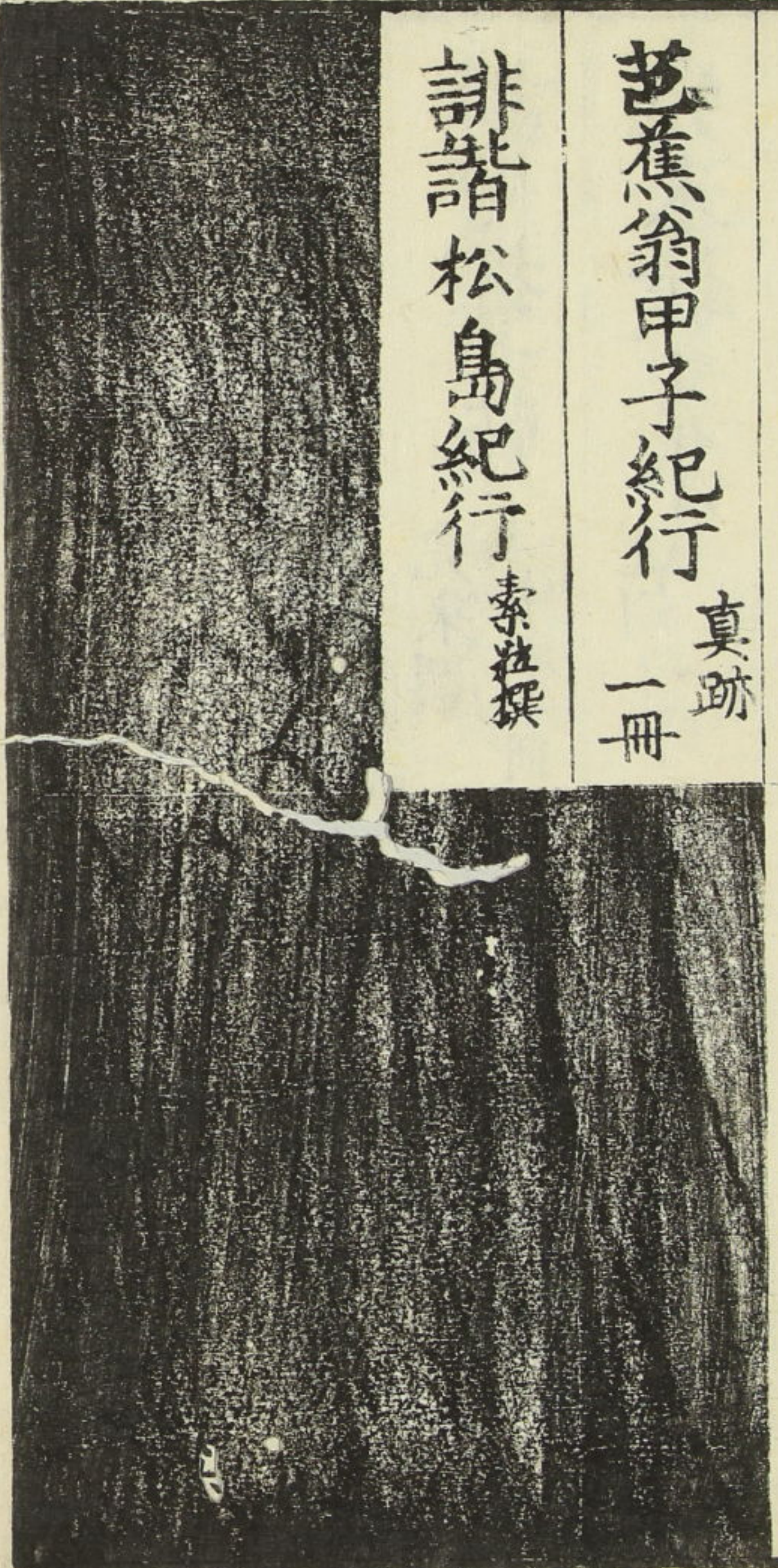
宋晋而巡思れ業もく七雲流也
其凡先師合の表とて撰書かこく

芭蕉翁甲子紀行

真跡
一冊

誹諧松島紀行

素性撰



山東遊覽誌

小本
二冊

此書は江の浦後集を以て素性と徹細小
る後乃小名社家の編起は其教句と附

山東遊覽圖會

北尾經翠画
近刻

右の書と云く之を東宮文情と
也加獎海濱の沢温泉湯林林と云

向嶋 遊覽 画景硯の水

淡筆庵久筆
狂筆と加本刻

大山橋より上本母寺まゝの障の二氣久
と云はる小必一遠境の障空と云む

日く八景圖繪

北尾經翠画
六しき指一枚

蜀山人先生の狂詩亦一巻と云ゆ
曼地乃外遠境は風安と見ると圖

前句

新堀判者川柳考

以書初編を當時まて六十七編乃至

高點

誹風柳樽

小本都鄙よりく流行する本年个
一冊 久く其笑を以てする再雅俗これ
新句年々集之出版 亦以笑に其れの後集来腮とく



